
イストワール

m e y u u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イストワール

【Nコード】

N3418I

【作者名】

me y u u

【あらすじ】

突然の両親の死。

高校を中退し、ホストへなった優羽。

そこで出会った先輩ハル。

運命の女性との出会い。

優羽の数年間の物語。

優羽と希美との出会い

優羽がホストの仕事を始めて一年が経とうとしていた。

だいが接客にも慣れてきた。指名量も半年前とくらべると増えている、常連の客はくるみ以外にも出来た。

「優羽、あ〜ん」優羽よりもだいが年上28歳の常連の女が優羽の口にイチゴをつっこんだ。

この女性、きれいなドレスを身にまとい、長い髪をサイドでまとめ、うなじを出している。上下に付けた付けまつげで目玉が見えない程だった。「優羽、おいしい？かすみにもあ〜んして？」猫なで声を出し、かわいく言うかすみ。

「かすみさん、あ〜ん」今度は優羽が一口大に切られたパインをかすみの口に入れた。

「おいしいね」かすみが優羽にベタベタくっつきながら言った。

優羽は慣れてきた事もあり、このような事をして、もう照れたりしなくなっていた。以前は女性にベタベタくっつかれると照れてしまい、少し頬が赤くなってしまっていた。

「かすみさん、俺もパイン食べたいな」とかすみに微笑みかけて言った。

「まあ、優羽はかわいいなあ〜」と優羽の頭をなでなでしたかすみ。

ハルには、若い女性には一つ年上と言われていたが、かすみの一つ年上となると29歳。優羽はどろがんばつても29歳には無理があった。なので、かすみには自分の本当の年齢、18歳として接しているのである。だがかすみは年下好きなようで、優羽の事を

かわいい、かわいいと気に入っていた。

「優羽さん、もうそろそろお時間です」

いつも通り、ボーイが優羽にこっそり伝えた。

優羽は頷いた。

「かすみさん、もう時間が来ちゃったみたいですよ」優羽は少し寂しげな表情の演技をしながらかすみを見た。

「優羽、またお姉さんすぐに来てあげるからそんな寂しそうな顔しないでえ〜」と優羽を抱きしめ、頭をなでなでするかすみ。

「約束ですよ？また絶対来て下さいね？」寂しそうに言う優羽。もちろん演技だ。

「うんっ約束。すぐにまた来るからいい子でまってるんだぞ」と優羽の小指と自分の小指を絡ませたかすみ。

「外まで送りますね」と立ち上がり自然に誘導する優羽。

外に出ると店の前にタクシーが待っていた。そのタクシーに乗る前に、もう一度かすみは優羽を抱きしめて。

「大好きだよ」と優羽の耳元でささやいた。

優羽は抱きしめられた自分の体を優しく離し、何も言わず、かすみの目をじっと見つめ、優しく微笑んだ。

かすみはタクシーに乗り、出発した。かすみはタクシーの中から振り返り優羽の姿が見えなくなるまで見ていた。

優羽の体はタクシーの方を向いてたいたが、目は全然タクシーの方

を見てはいなかった。

優羽は休憩に入ろうと思いい、店に戻ろうとした時、店の看板をじっと見つめている女の子がいた。

見た感じ、優羽と同じぐらいの年頃。しかし、ホストクラブに来るような子には見えない。クラスにいても、あまり目立たない感じの普通の女の子だった。

その子は店の入り口の横に飾られている、ホストの顔写真を穴が空く程見つめている。

しかも、優羽の写真を。

優羽は声をかけようかどうしようか迷ったが、最近では普通の子もホストに通つてると言うのをハルから聞いた事もあって、思い切って声をかけてみた。

「あの。良かったら中へどうぞ」

女の子は振り向き、優羽の顔を見て驚いた顔をしてキョトンとしていた。

きっと今見ていた写真のやつが目の前にいるから驚いてるんだろうと優羽は思った。

優羽は奥二重の優しい目で女の子を見つめ、優しく微笑んだ。

「さあ、中へどうぞ」優羽が誘導した。

女の子は顔を赤くし、コクリと頷いて優羽に付いて言った。

優羽は内心、金持ってるかなと心配になった。

女の子を席へ案内し、時間制限がある事やお店のシステムを簡単に伝えた。

「それでは、ご指名ありますか？」と聞くと、女の子はコクリと頷

いた。

「安積君で」と答える。

優羽は一瞬誰か分からなかった。まさか自分の名字を知ってるなんてビックリした。

「俺ですか？」一応確認して聞き返した。

「はい」と答える女の子。

「かしこまりました。お名前お伺いしてよろしいですか？」ちょっと動揺して聞く優羽。

「希美です。」と緊張しながら答える希美。

「希美さん、かわいいお名前ですね。隣に座ってもよろしいですか？」と聞きながらも、どうして自分の名字を知ってるのか不思議に思う優羽。

「はい」と恥ずかしそうに希美が答えた。

優羽はゆつくりと、気持ち希美から離れて座った。

「希美さん、飲み物は何にしましょうか？」優羽は平静を装って、希美に聞いた。

「私、お酒飲めないんです。すみません。」すこし間を置いて希美が言った。

「じゃあ、ジュースにしましょうか？オレンジでいいですか？」優羽が優しく聞いた。

「はい、お願いします。」希美がもごもごしゃべった。

優羽はボーイにオレンジジュースを二つ頼んだ。

店に入ってからずっと下を向いてる希美に優羽は優しく話かけた。

「希美さん、こうゆう所は初めてですか？」

緊張せずにこっち向いてください」

希美は一度深呼吸をし、優羽の方に体を向け顔を上げた。

その時、ボーイがオレンジジュースを二つ持って優羽に渡した。

優羽は二つのオレンジジュースを一つ希美に手渡し、グラスとグラスをチリンとくっつけて乾杯した。

希美はオレンジジュースが入ったグラスを口に持っていき傾けてのんだ。それを見た優羽は少しドキっとしてしまった。

一見普通の女の子だが、よく見ると、色白の肌が綺麗で、長く自然に上がったまつげ、高いとは言えないが、かわいらしい鼻、ほんのり赤いやわらかそうな唇。その唇の下にホクホクがあった。そのホクホクが優羽にはとても魅力的に見えた。

希美の横顔に見とれていた優羽はハッと我に返り、咳払いをした。

「さっき店の外で俺の写真見てましたね。実際会ってみてがっかりしましたか？」優羽が冗談混じりで聞く。

「…」何もしゃべらず首を横に振る希美。

「良かった。俺写真写り良いから、実際会ってみてなんか違うみたいなシヨックなんで」ハニカミながら優羽が言った。

「安積くんは昔からかっこいいよ」優羽の目を見ながら真剣に言う希美。

ん？昔から？優羽は希美に会うのは初めてだし、希美も初めて店に

来たし、どうゆう事なんだ？
と思う優羽。

優羽が希美を見ると、しまったとゆう顔をして、下を向いている。

「希美さん、俺の名字どうして知ってるんですか？」思いきって優羽が聞いた。

すこしの沈黙の後、希美がしゃべった。

「安積くん、私ね安積くんと同じ高校だったんだよ。」

「えっ！」と驚く優羽。希美の事は全く記憶にない。

「違うクラスだったから安積君は私の事知らないと思うんだけど・・・」
と優羽が知ってる事を少し期待して言う希美。

「ごめん・・・覚えていない事に悪いと思いつた優羽。

「ううん、いいの。」ちよつと残念そうに希美が答えた。

「希美さんは俺の事知ってたんだ？」

「うん、だって安積君、女の子に大人気だったし、その、私も・・・」
「恥ずかしそうに希美が言った。

それを見て、優羽も照れて頬を赤くした。

「少し前に引越してきてね、ちよつどこのお店の前を通りかかって、写真が飾ってあったから、見たら安積くんに似てるなって思ったんだけど、本人かどうか分からなくて・・・」

「それで、確認しにまた来たんだね？」

聞いた優羽にコクリと頷く希美。

「なんだあ、そうだったんだ。来てくれてありがとう。でも、初めから言ってくれば良かったのに」優羽が笑顔で希美に言った。

「ごめんなさい。どうしようか迷ったんだけど、もしかしたら安積くん、高校の時の事は思い出したくないのとか思って・・・」と優羽の両親の事故を気遣う希美。

「もう大丈夫だから。ありがとう。」心から希美にお礼を言った。確かに優羽は高校と言うと、両親の事故の事を思いだしてしまい、大丈夫なんかじゃない。しかし、それよりも、自分にわざわざ会いに来てくれて、心配してくれる人が居た事が優羽にはとても嬉しかった。

それから、優羽は高校にいて、昼休みにおしゃべりでもしているよつかのように希美との時間を楽しんだ。

ボーイがやってきて、優羽に時間がきた事を知らせた。

優羽は今まで接客をした時間で希美との時間は一番短く感じた。もっと希美と話がしたかった。

希美が立ち上がり、帰ろうとする後ろ姿を見つめて、もう会えないのではないかとゆう不安にかられた。

「希美さん、あの」また会いたいと言え。優羽は自分に気合いを入れた。

「あの・・・お金大丈夫ですか？」全く見当違いな事を言った優羽。

「大丈夫。今月のバイト代全部持ってきたから」心配するなとゆう顔をしてニッコリ希美は笑った。
結局、また会えるのかどうか分からないまま、希美とわかれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418i/>

イストワール

2010年10月28日03時10分発行